



フェルッチョ・ブゾーニの夢

畑野小百合

フェルッチョ・ブゾーニ (1866～1924)

読響は、今月の演奏会でブゾーニのヴァイオリン協奏曲を取り上げます。この機会に、知られざるブゾーニの人生と功績を、彼の研究の第一人者である畑野小百合さんに寄稿していただきました。（編集部）

「夢のような発明」

1911年、春。ドイツのある音楽雑誌に、4月1日付の報告が掲載された。タイトルは「夢のような発明」、発信地は「ニューヨーク」、匿名の寄稿者は「アプリルス・フィッシャー」を名乗っている。なんでも、アメリカの研究者が新しい録音機器を開発し、未来の音楽、それも約150年後の音楽の波動をとらえ再生することに成功したという……。

これはもちろん、エイプリルフールのジョーク記事。ジャーナリストイックな筆致にユーモアをたっぷり織り交ぜたこの文章は、この日45歳の誕生

日を迎えたフェルッチョ・ブゾーニのお茶目な企てであった。

越境の人

1866年にイタリアのトスカーナ州、フィレンツェ近郊のエンポリで生まれたブゾーニは、音楽家の両親のもと、7歳で初めてのピアノ公開演奏を行い、作曲も開始した。その後、ウィーン、グラーツ、ライプツィヒで研鑽を積み、1888年に22歳でフィンランドのヘルシンキ音楽院のピアノ教師に着任。さらに、ロシア、アメリカでの演奏・教育活動を経て、1894年からドイツのベルリンに拠点を置いた。第一次世界大戦中はスイスのチューリヒに疎

開していたが、戦後ベルリンの自宅に戻り、1924年に58年の生涯を終えた。

「リストの再来」とも謳われたブゾーニは、ピアニストとしてもっとも華々しい成功を収めた。大規模なツアーはヨーロッパとアメリカ各地にその名を轟かせ、眩いばかりの名声は、彼の作曲家と

しての活動に陰を作ってしまうほどであった。彼の創作ジャンルは、オペラ、管弦楽、室内楽、声楽、器楽と、多岐にわたる。文才にも恵まれ、劇作品の台本を自ら執筆し、多くの論考も物した。さらに、優れた演奏家としての洞察を盛り込んだ楽譜の校訂をライフワークとする一方、生涯を通して教育活動にも熱心であった。ピアノの弟子にはレオ・シロタやエゴン・ペトリ、作曲の弟子にはエドガー・ヴァレーズやクルト・ヴァイルが含まれる。

ブゾーニとバッハ

ブゾーニの名が一般に知られているとすれば、それはバッハ作品のピアノ編曲によってであろう。アメリカ・ツアーに同行した妻が「ミセス・バッハ＝ブゾーニ」と紹介された、という弟子ペトリの証言は、両者の名がブゾーニの生前から強く結びついていたことを示している。



ピアニストとしても活躍したブゾーニ

バッハ作品のブゾーニによるピアノ編曲は、啓蒙的な意図によるところが大きい。当時J. S. バッハの音楽は今ほど広く親しまれておらず、特に彼のオルガン作品や規模の大きい楽曲は、一般の聴衆には縁遠いものであった。それを世俗のコンサートホール用に「救済」し、受け入れやすい形で聴衆の耳に届けることを、ブゾーニは使命と考えていたのである。

バッハ作品は、ブゾーニの作曲においてもさまざまな形で取り上げられている。たとえば、彼の代表作〈対位法的幻想曲〉はバッハの〈フーガの技法〉BWV1080、ソナチネ第5番はバッハの〈ファンタジーとフーガ〉ニ短調BWV905に基づいている。

「新音楽」の庇護者

30年近くブゾーニの生活拠点であったベルリンのヴィクトリア・ルイーゼ広場の一角では、今も記念銘板がか

つての住人を偲^{しの}ばせている。当時、ここはちょっとした名所であった。ブゾーニご自慢の図書室には約5,000冊もの蔵書が並び、仏像を含む美術コレクションが音楽ルームをエキゾチックに染めていた。ここでは、レッスンや音楽サロンがたびたび開催され、ジョットという名のセントバーナードが、家主とともに来訪者を迎えるのであった。



ベルリンのブゾーニ家の内部
©Staatsbibliothek zu Berlin – Preußischer Kulturbesitz Musikabteilung mit Mendelssohn-Archiv

の庇護者であった。新しい音楽や上演機会の少ない作品を紹介するブゾーニ主催の演奏会シリーズは、彼の多大な出資のもと、1902年からの7年間で12回開催された。出演は現在のベルリン・フィルハーモニー管弦楽団、指揮は可能な限り作曲者に託し、叶わない場合はブゾーニが指揮台に立った。演奏されたのは、シベリウス、ディーリアス、フォーレ、ダンディ、ドビュッシー、フランク、プフィッツナー、ニールセン等、国際的な作曲家たちの作品で、約半数がドイツ初演であった。

ブゾーニの提言

ブゾーニは、主著『新しい音楽美学の構想』（初版1907年、以下『構想』）で、いくつかの重要な提言を行った。通底するのは、音楽の発展が慣習や制約に縛られているという問題意識だ。

提言のひとつは、三分音（全音を3等分した音程）に基づく新しい音組織の導入である。これは西洋音楽の12平均律（オクターヴを12等分した半音を最小単位とする音組織）の伝統に対するアンチテーゼだった。さらに彼は、音組織の刷新という点に踏み込んで、アメリカで開発されたばかりのテルハーモニウムという電子楽器に言及し、音律や楽器の制約から解放された音の創出を可能にするであろう技術革新に、大きな期待を示している（冒頭の「夢のような発明」は、明らかにこの研究のパロディである）。

ブゾーニが同書の執筆を終えたのは、1906年11月。シェーンベルクが自由な無調に歩みを進め、イタリア未来派が機械や電気を用いた音楽についてのマニフェストを出したのがいずれも1910年頃であることを考えると、ブゾーニは美学的理念において時代に先んじていた。

夢見たものは……

「若き古典性 Junge Klassizität」の語は、第一次世界大戦後、ブゾーニが今後の芸術について述べた言葉としてよく知られている。これは「美に関する新しい理想」とでも解されるべきもので、過去になされたすべてのことを踏まえ、美的判断の新しい基準を作っ

ていこう、という未来志向の態度表明である。そしてこれは、特定の過去の様式に範をとったり、その意味を新たな文脈の中で読み直したりする新古典主義の考え方とは、本質的に異なるものだ。

ブゾーニは、『構想』で提示したもっともラディカルなアイデアを、自身の創作において追求しなかった。その一因は、彼が「生涯における犯罪のような断絶」であるとした第一次世界大戦が、技術革新や、それがもたらす未来への夢を打ち砕いたことにあったのかもしれない。

しかし、ブゾーニは別の夢を描いていた。1910年代、彼はオペラに関する考察を深め、その創作に本腰を入れた。1913年に書かれ、『構想』第2版（1916年）にも挿入された文章「オペラの未来」で彼は、現実には起こりえないことを題材とし、明らかなフィクションとして客観的に鑑賞されるオペラの理想を語った。感情移入を前提とするアリストテレス的劇作法とも、日常を赤裸々に描くヴェリズモ・オペラとも異なるこの理想は、オペラ〈ファウスト博士〉等の特徴づける一種の異化効果をもたらした。彼の夢は、科学が切り拓くであろう現実世界から、文学的に形成される非現実世界へと推移していったのである。

（はたの さゆり・音楽学）

シェーンベルクの〈月に憑かれたピエロ〉の初演（1912年10月）に立ち会うことができなかったブゾーニは、1913年6月、作曲者を自宅に招き、音楽史上の表現主義のマイルストーンとなったこの作品を再演させた。耳を傾け、意見を交わしたのは、ベルリンの音楽界の要人たち。ブゾーニの私邸は、新しい音楽に関心をもつ者たちに議論の場を提供していた。

故郷ウィーンの保守性に辟易^{へきえき}していたシェーンベルクを援助し、1911年のベルリン転居を可能にしたのもブゾーニだった。両者の関係は、無名のシェーンベルクがブゾーニに自作の交響詩を送った1903年に始まる。その後、充実した内容の書簡が往復する中で、シェーンベルク作品のブゾーニによる編曲も生まれている。

ブゾーニは、公の場でも「新音楽」

心に残るクラシック

恩田 陸 ——④〈最終回〉

Riku Onda

サントラ・マエストロの職人芸

チャイコフスキー：バレエ音楽〈眠れる森の美女〉



©読売新聞社

初めて買ったレコードというのは、誰でもよく覚えているものだ。私が所属していた大学の音楽サークルの合宿では、新入生が初めて買ったシングルレコードとLPレコードを告白するというのが習慣になっていて、正統派ジャズバンドに入ってきた彼らのルーツがアイドルだったりカントリーだったりするのに受ける、というのがお約束だったのだ。

私が初めて買ってもらったLPレコードは、映画音楽（もちろん洋画）のテーマ曲集だった（ちなみに、シングルは原田真二「OUR SONG」）。「風と共に去りぬ」「第三の男」「道」「荒野の七人」「ある愛の詩」「シェルブールの雨傘」「ゴッドファーザー」「スティング」など、このレコードで先に覚えた曲も数多い。今や映画音楽というとエンドロールに流れる主題歌のことだと思っている人も多いけれど、私が小学生だった当時、映画音楽くらいカッコいい音楽

はないと思っていたのを覚えている。

その後もサウンドトラック好きは続き、一作品で最初買ったのは「未知との遭遇」だった。「戦場のメリークリスマス」は名盤だと思うし、長年版權の関係か名曲とされつつも出ていなかった「ラストタンゴ・イン・パリ」を手に入れた時はとても嬉しかった。当然、ミュージカル映画も好きで、「ラ・ラ・ランド」はスコア版まで買ってしまった。

さて、そんな「劇伴」好きの私が、クラシック・バレエを全幕通して見るようになったのはごく最近のことである。なので、もちろんチャイコフスキーの三大バレエ曲は知っていたものの、曲と踊りが一致するようになったのも本当に最近だ。

〈白鳥の湖〉はパロディで演奏されることも多いので、クラシックを聴かない頃から大体知っていたし、〈くるみ割り人形〉もバレエ抜きでもよく演奏されるのでほとんど知っていたが、バレエを

観ない限り、意外ときちんと聴く機会がないのが〈眠れる森の美女〉である。

クラシック・バレエの最高傑作と呼ばれる〈眠れる森の美女〉であるが、今ではバレエのガラ・コンサートでよくテーマ曲として演奏される第一幕冒頭の胸踊るテーマには、何度聴いても新鮮にわくわくさせられる。

そして、繰り返し全幕で観るようになり、観る度にじわじわ驚嘆させられるのは、チャイコフスキーの「劇伴」職人としての凄まじさなのであった。

「劇伴」を作る際のドキュメンタリーや本などで見聞きしたところでは、昔も今もこれらの作曲と編曲はたいへんな職人芸で、「こんな雰囲気で」「こんなイメージで」と細切れのメロディーを何十曲も短期間に作る、というのが普通である。

ところが、バレエの場合、さらに「振付」という要素が加わるのだ。

三大バレエを振付したマリウス・プティパが、チャイコフスキーのために書いた〈眠れる森の美女〉の台本兼舞踊プランというのを読んだことがある。

「簡潔なプラン」と但し書きが付いている割に、かなり具体的だ。いや、はっきり言って相当に細かい。

「オーロラ姫の登場。愛らしく生氣はつらつとした4分の2拍子。32小節。終りは8分の6拍子で、力強く、16小節」「貴婦人方のためのアレグロ。48小節。



チャイコフスキー
(1840～1893)

マリウス・プティパ
(1818～1910)

小姓たちの踊りのしめくりは、ポルカのリズム」「オーロラ姫のヴァリアシオン。4分の3拍子。ヴァイオリン、チェロ、ハープはピッツィカートで。ときにリュートとヴァイオリンで」等々。

プティパや他の関係者の書いたものを見るに、チャイコフスキーが指示を嫌がったとか、苦勞したとかいう記録は残っていないので、チャイコフスキーはこの条件をあっさりクリアして職人芸を発揮したらしい。これだけの制約である名曲の数々。キャッチーで一度耳にしたら忘れられないフレーズは、見事にダンサーのステップと一致し、プティパと一体化し、もはや音楽を耳にただけでバレリーナの姿や足さばきまで蘇るのである。

恐るべし、サントラ職人チャイコフスキー。「劇伴」好きとしては、彼こそが最高のサントラ・マエストロであると讃えずにはいられない。

◆次号からは加藤一二三さんです。

◎首席フルート奏者

フリスト・ドブリノヴ

Hristo Dobrinov

コンサートは生き物 毎回新たな挑戦です

「3月は、ピゼーの〈アルルの女〉やベルリオズの〈幻想交響曲〉で、フルートが大活躍します。その魅力を教えてください」

すべての木管楽器は、オーケストラの中での機能や求められる音質が異なっています。フルートは輝かしい音から深みのある音、純粋な音まで多彩な音色を持つ楽器です。フルート奏者としてオーケストラに音色が馴染んでいると同時に、作曲家の意図に沿えていることが私の目標。

これらの大曲はフルートのソロも多いですが、他の楽器との中でどのような音色を奏するべきかがとても重要です。また時々、どこから音が来ているのかと思わせるような、オーケストラのハーモニーに完全に溶け合うような音を出せるのもフルートだと思います。温和で寛容な優しい音色を出せるよう努めたいです。

〈アルルの女〉や〈幻想〉は実際に起きたことでなく、ある人の夢（夢想）

やその中での深い感傷的な葛藤を表現していることを知りつつ聴くと興味深いですよ。

「1977年、ブルガリア・ソフィア生まれ。ブルガリア国立ソフィア音楽院とドイツ・ケルン音楽大学で学ぶ。98年から2005年までドイツのフィルハーモニー・デア・ナツィオーネン、05年から17年までマレーシア・フィルハーモニー管弦楽団で、首席フルート奏者として活躍。今年1月に読響に入団しました」

コントラバスを弾いていた祖父はオーケストラのマネージャー、母親はアマチュアのチェリストと、音楽に対する感謝と敬意に包まれた環境で育ちました。義父はプロの演奏家（フルート奏者）で、よく家で楽しそうに仲間と演奏する姿を見てフルートに興味を持ち、8歳の時レッスンを始めました。しかし、子供の手には扱いにくい楽器で、始めは練習が嫌いに。私が11歳の時に義父が他界し、その頃から練習の楽しさを学び、それからずっと練習漬け。その後、プロの演奏家になりましたが、練習は今でも好きです。

約20年間、ドイツとマレーシアのオーケストラに所属。背景や学校が異なる多くの優れた演奏家と音楽を作る



機会に恵まれ、コンサートで世界中を回りました。その中で感じたことですが、日本の観客は非常に素晴らしい。音楽に敬意を払い、コンサートを楽しんで鑑賞されている。私の妻は日本人で、過去12年間に日本に来る機会は多く、日本の音楽シーンに親しむことができました。

その後、読響のフルート奏者の募集があることを知り、とても嬉しく思いました。読響は、個々の団員が高度な技術や音楽を持ちながら、アンサンブルが調和している、統一感のあるオーケストラです。また、雰囲気がとても良くて落ち着きます。

「オーケストラの魅力とは何ですか？」

15歳でオーケストラを初体験。その魅力に深く感銘を受け、後にオーケストラの一員になり、今に至っています。オーケストラのコンサートは、音

楽のトップ・エンターテインメント。何百年も前に作曲された音楽が現在再現されて蘇り、より多くの人が聴くことができます。録音を楽しむ人もいますが、オーケストラのコンサートは生き物で、今日と明日では異なる、そういうところに

興奮しますね。ステージに向かうたび、新たなコンサートへの挑戦を楽しんでいます。これは大きな喜びです。
「今後の目標や将来の夢を聞かせてください」

私は若い世代の頑張っている演奏家を教えることが好きです。多くの場合、レッスンは1対1で行われ、それは演奏技術の習得には役立ちますが、後に他の人とアンサンブルをする際には別の要素が必要です。お互いのレッスンを聴き合ったり話し合ったりと、若い人々が同じ空間でフルートを学ぶことができる場所（スタジオのようなもの）をいつか作りたいと思っています。しかし、いまは読響に集中です！

また、私には2歳になる息子がいます。とってもかわいいです。今後は日本語をもっと学んで、同僚や新しい日本の友達とコミュニケーションできるように頑張りたいです。

興奮のリズム! カンブルランのベートーヴェン第7番

4/7 (土) 14:00 第206回 土曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

4/8 (日) 14:00 第206回 日曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

ラモー: 歌劇〈ダルダニウス〉組曲から

モーツァルト: ヴァイオリン協奏曲 第5番〈トルコ風〉

ベートーヴェン: 交響曲 第7番

指揮: シルヴァン・カンブルラン (常任指揮者) ヴァイオリン: 佐藤俊介



佐藤俊介

“チーム長原”が繰り広げる二つの弦楽八重奏曲

4/9 (月) 19:30 第18回 読響アンサンブル・シリーズ
よみうり大手町ホール ※19:00からトーク

《長原幸太リーダーによる室内楽》

メンデルスゾーン: 弦楽八重奏曲 作品20

エネスコ: 弦楽八重奏曲 作品7

ヴァイオリン: 長原幸太 (コンサートマスター) ほか



長原幸太

カンブルランが振る〈くるみ割り人形〉&〈春の祭典〉

4/13 (金) 19:00 第611回 名曲シリーズ
サントリーホール

4/14 (土) 14:00 第103回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ
横浜みなとみらいホール

4/15 (日) 15:00 第9回 パルテノン名曲シリーズ
パルテノン多摩大ホール

チャイコフスキー: バレエ音楽〈くるみ割り人形〉から

モーツァルト: クラリネット協奏曲

ドビュッシー: クラリネットと管弦楽のための第1狂詩曲

ストラヴィンスキー: 春の祭典

指揮: シルヴァン・カンブルラン (常任指揮者) クラリネット: ポール・メイエ



ポール・メイエ

常任ラスト・シーズンに贈る、マーラー晩年の傑作

4/20 (金) 19:00 第577回 定期演奏会
サントリーホール

アイヴズ: ニューイングランドの3つの場所

マーラー: 交響曲 第9番

指揮: シルヴァン・カンブルラン (常任指揮者)



シルヴァン・カンブルラン

4月 公演の聴きどころ

2018年度シーズンは、常任指揮者カンブルランが任期の最後を迎える。2010年4月の就任以来、読響の実力を引き上げ、フレッシュな魅力を加えてきたカンブルランが4月にさっそく来日し、3プログラムで登場する。シーズン開幕となる7日・8日の《マチネー》では、ラモー、モーツァルト、ベートーヴェンと、バロックから古典派に至るクラシカルなレパートリーを披露する。躍動感あふれるベートーヴェンの交響曲第7番では、音楽の喜びを爆発させる。モーツァルトのヴァイオリン協奏曲〈トルコ風〉では、今年6月に名門オランダ・バッハ協会の音楽監督に就任する佐藤俊介が共演し、爽やかな風を吹かせる。

13日《名曲》・14日《みなとみらいホリデー名曲》・15日《パルテノン名曲》は、チャイコフスキー〈くるみ割り人形〉とストラヴィンスキー〈春の祭典〉というロシアの代表的なバレエ音楽で幕開け。カンブルランならではのシャープな感覚で、クリアな響きと鮮烈なリズムを生み出す。また、協奏曲では世界的クラリネット奏者のメイエを迎え、おなじみのモーツァルトに加え、ドビュッシーの洒落た小品を演奏する。フランス人同士の顔合わせならではの軽妙な掛け合い、カラフルで甘い音色に期待が高まる。

20日《定期演奏会》は、マーラーが完成させた最後の交響曲である第9番がメインのプログラム。約90分の曲内で、マーラーは自身の人生を振り返るかのように過去の自作から多くの引用を行い、また、第4楽章の最後の小節は「死に絶えるように」と指示している。全体をとおして「死」のにおいや諦観にあふれる大作だ。前半はアメリカの作曲家アイヴズの作品を取り上げる。カンブルランらしく現代から作品を照射したモダンな解釈に注目したい。

9日はよみうり大手町ホールで室内楽などをお届けする《読響アンサンブル・シリーズ》。読響コンサートマスターの長原幸太が率いる「チーム長原」が繰り広げる、メンデルスゾーンとエネスコの弦楽八重奏曲での熱い演奏をお楽しみに。

(文責: 事務局)

読響チケットWEB

検索

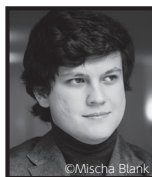
新鋭ショハキモフが振る《ラフマニノフ&チャイコフスキー》

4/28 (土) 14:00 第207回 土曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

4/29 (日) 14:00 第207回 日曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

ムソルグスキー (リムスキー=コルサコフ編): 交響詩〈はげ山の一夜〉
ラフマニノフ: ピアノ協奏曲 第2番
チャイコフスキー: 交響曲 第5番

指揮: アジス・ショハキモフ ピアノ: ガブリエラ・モンテロ



アジス・ショハキモフ

ウィーン・フィルの女性コンマス、ダナイローヴァが共演

5/15 (火) 19:00 第612回 名曲シリーズ
サントリーホール

ロッシーニ: 歌劇〈ウィリアム・テル〉序曲
グラズノフ: ヴァイオリン協奏曲
チャイコフスキー: 交響曲 第6番〈悲愴〉

指揮: ヤデル・ビニャミーニ ヴァイオリン: アルベナ・ダナイローヴァ



ヤデル・ビニャミーニ

鬼オヴォルコフが華麗に響かせる名曲〈展覧会の絵〉

5/20 (日) 14:00 第104回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ
横浜みなとみらいホール

ブラームス: 大学祝典序曲
メンデルスゾーン: ヴァイオリン協奏曲
ムソルグスキー (ラヴェル編): 組曲〈展覧会の絵〉

指揮: イラン・ヴォルコフ ヴァイオリン: クロエ・ハンスリップ



イラン・ヴォルコフ

〈不安の時代〉&〈革命〉、20世紀の“魂の叫び”を聴く!

5/30 (水) 19:00 第578回 定期演奏会
サントリーホール

プロコフィエフ: アメリカ序曲
バーンスタイン: 交響曲 第2番〈不安の時代〉
ショスタコーヴィチ: 交響曲 第5番

指揮: イラン・ヴォルコフ ピアノ: 河村尚子



河村尚子

お申し込み・
お問い合わせ

読響チケットセンター
(10:00~18:00/年中無休)

0570-00-4390

ホームページ・アドレス <http://yomikyo.or.jp/>

“カリスマ”井上道義の〈田園〉&チェロの宮田大が共演

6/3 (日) 15:00 第10回 パルテノン名曲シリーズ
パルテノン多摩大ホール

ドヴォルザーク: チェロ協奏曲
ベートーヴェン: 交響曲 第6番〈田園〉

指揮: 井上道義

チェロ: 宮田 大



井上道義

欧州の歌劇場で活躍するマイスターが指揮する R. シュトラウス

6/19 (火) 19:00 第579回 定期演奏会
サントリーホール

R. シュトラウス: 交響詩〈ドン・キホーテ〉
R. シュトラウス: 歌劇〈カプリッチョ〉から前奏曲と月光の音楽
R. シュトラウス: 歌劇〈影のない女〉による交響的幻想曲

指揮: コルネリウス・マイスター (首席客演指揮者)

チェロ: 石坂団十郎

ヴィオラ: 柳瀬省太 (読響ソロ・ヴィオラ)



石坂団十郎

マイスターが振るドヴォルザーク&長原幸太が弾くブルッフ

6/23 (土) 14:00 第105回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ
横浜みなとみらいホール

スメタナ: 歌劇〈売られた花嫁〉序曲
ブルッフ: スコットランド幻想曲
ドヴォルザーク: 交響曲 第8番

指揮: コルネリウス・マイスター (首席客演指揮者)

ヴァイオリン: 長原幸太 (読響コンサートマスター)



コルネリウス・
マイスター

音楽史に燦然と輝く傑作! マーラーの合唱付の大曲〈復活〉

6/28 (木) 19:00 第613回 名曲シリーズ
サントリーホール

6/29 (金) 19:00 第20回 大阪定期演奏会
フェスティバルホール(大阪)

マーラー: 交響曲 第2番〈復活〉

指揮: コルネリウス・マイスター (首席客演指揮者)

ソプラノ: ニコール・カベル

メゾ・ソプラノ: アン・ハレンベリ

合唱: 新国立劇場合唱団 (合唱指揮=富平恭平)



ニコール・カベル

読響&芸劇 0才から聴こう!! 4才から聴こう!! 春休みオーケストラコンサート

■ 3/29 (木) 11:30 / 13:30 東京芸術劇場

指揮：円光寺雅彦

ソプラノ：コロネりか バリトン：岡昭宏

ナビゲーター：中井美穂

ブラームス／ハンガリー舞曲 第5番

ベートーヴェン／交響曲第5番〈運命〉から第1楽章

モーツァルト／歌劇〈フィガロの結婚〉から“もう飛ぶまいぞ、この蝶々” ほか

[料金] S ¥3,500 A ¥2,500 こども (3才以上小学生まで) ¥1,000

※11:30開演…0才から入場できます。

2才児まで保護者のひざ上の場合は無料(ただし、保護者1名につき子ども1名まで)。

13:30開演…4才から入場できます。すべて有料となります。

[お問い合わせ] 東京芸術劇場ボックスオフィス 0570-010-296

(休館日を除く10:00～19:00)

パルテノン多摩 GW スペシャル ファミリーコンサート

■ 5/6 (日) 15:00 パルテノン多摩 大ホール

指揮：海老原光

[この曲、知ってる! ～運動会と校内放送～]

ドヴォルザーク／家路(交響曲第9番〈新世界から〉第2楽章から)、ユーモレスク、

ハチャトゥリアン／剣の舞、スッペ／軽騎兵序曲 ほか

[懐かしい! ～あの頃の音楽の授業～]

ロッシーニ／〈ウィリアム・テル〉序曲から“スイス軍の行進”、

マリー／金婚式、ケテルビー／ペルシャの市場にて、

J. シュトラウスⅡ世／美しく青きドナウ ほか

[料金] 一般 ¥2,500 学生 ¥1,000 小・中・高校生 ¥500

[お問い合わせ] チケットパルテノン 042-376-8181 (休館日を除く10:00～18:00)

〈コンポージアム2018〉ウンスク・チンの音楽

■ 5/24 (木) 19:00 東京オペラシティ コンサートホール

指揮：イラン・ヴォルコフ

クラリネット：ジェローム・コント チェロ：イサン・エンダース

ウンスク・チン／マネキン(2014-15)、クラリネット協奏曲(2014)、

チェロ協奏曲(2006-8, rev.2013) ※すべて日本初演

[料金] 一般 ¥3,000 学生 ¥1,000

[お問い合わせ] 東京オペラシティチケットセンター 03-5353-9999